世に語り伝ふること

名前（　　　　　　　　　　　）　日づけ（　　／　　）　できた数（　　　／28）

使い方　本文を声に出して読んでから、傍線の番号を手がかりに解きます。**この段の山は、完了の助動詞「ぬ」の識別、「あいなきにや」の「に＋や」、「やがて」「さらに〜ず」「詮なし」などの重要語、そして「うそが事実として定まっていく仕組み」**です。

あらすじ＝兼好は、世間で語り伝えられる話の多くはうそだと言う。人はもともと実際以上におおげさに物を言うが、そこに年月の経過と場所の隔たりが加わると、言いたい放題に話が作り上げられ、文字に書きとめられて、そのまま事実として定まってしまう。その道を知らない人ほど名人を神のように言い、通じている人はまるで信用しない。口まかせのうそはすぐ見破られるが、いかにも本当らしく、わざとぼかしながらつじつまを合わせて語るうそは恐ろしい。自分の名誉になるうそは否定されず、みんながおもしろがるうそは一人で打ち消してもむだなので、黙って聞いているうちに証人にまでされて、うそはいっそう固まっていく。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

世に語り伝ふること、まことは①あいなきにや、②多くは皆虚言なり。③あるにも過ぎて人は物をいひなすに、まして年月過ぎ、④境も隔たりぬれば、いひたきままに語りなして、筆にも書きとどめぬれば、⑤やがてまた定まりぬ。道々の物の上手のいみじきことなど、⑥かたくなる人の、その道知らぬは、そぞろに神のごとくにいへども、道知れる人は⑦さらに信もおこさず。⑧音に聞くと見る時とは、何事もかはるものなり。かつあらはるるをも顧みず、口にまかせていひちらすは、やがて⑨浮きたることと聞ゆ。また、我もまことしからずは思ひながら、人のいひしままに、⑩鼻のほどおごめきていふは、その人の虚言にはあらず。⑪げにげにしく、ところどころうちおぼめき、よく知らぬよしして、さりながら、⑫つまづまあはせて語る虚言は、恐ろしきことなり。わがため面目あるやうに言はれぬ虚言は、人いたく⑬あらがはず。皆人の興ずる虚言は、ひとり、さもなかりしものをといはむも⑭詮なくて、聞きゐたるほどに、証人にさへなされて、⑮いとど定まりぬべし。

語注　あいなし＝おもしろくない。つまらない。気に入らない。虚言＝うそ。いつわり。事実でない作り話。「そらごと」と読むのがふつう（「きょげん」と読む本もあるので、お使いの教科書のルビに合わせること）。あるにも過ぎて＝実際にある以上に。おおげさに。いひなす（言ひなす）＝ことさらに言いたてる。おおげさに言う。まして＝言うまでもなく。なおさら。境＝場所。土地。ここでは出来事のあった場所。語りなす＝（事実とちがうように）話を作り上げて語る。やがて＝そのまま。すぐに。（現代語の「そのうち」ではない）定まる＝（事実として）決まってしまう。定着する。道々の物の上手＝それぞれの道の名人・達人。いみじ＝すばらしい。程度がはなはだしい。かたくななり＝物の道理をわきまえない。無風流だ。教養がない。そぞろなり＝むやみだ。わけもなく。さらに〜ず＝少しも〜ない。まったく〜ない。信をおこす＝信用する気になる。音に聞く＝うわさに聞く。かつ＝一方では。同時に。あらはる＝（うそが）ばれる。表に出る。浮きたること＝根拠のない、いいかげんなこと。うわついた作り話。聞ゆ（聞こゆ）＝（そう）聞こえる。思われる。まことし＝本当らしい。もっともらしい。おごめく＝もぞもぞと動く。「鼻のほどおごめきて」で、鼻のあたりを動かして得意げに話すようす。げにげにし＝いかにも本当らしい。まことしやかだ。おぼめく＝はっきりさせない。わざとぼかす。よし＝ふり。ようす。つまづまあはす＝話のつじつまを合わせる。面目＝名誉。ほまれ。言はれぬ（言はれぬる）＝言われた。「言は」＋受身の助動詞「る」の連用形「れ」＋完了の助動詞「ぬ」。完了の「ぬ」が下の体言（ここでは「虚言」）にかかるときの形は連体形「ぬる」なので、広く行われている本文は「わがため面目あるやうに言はれぬる虚言」。この記事の本文は「言はれぬ」と表記しているが、いずれにせよここは完了（＝言われた）と読む。お使いの教科書の本文・訳に合わせること。あらがふ＝言い争う。反論して否定する。興ず＝おもしろがる。詮なし＝かいがない。言ってもむだだ。証人＝そのことを見聞きしたと保証する人。いとど＝いっそう。ますます。ぬべし＝きっと〜てしまうにちがいない。※徒然草＝鎌倉時代末期に成立した随筆。作者は兼好法師。この文章は第七十三段の前半にあたる。このあとに「おほかたは、まことしくあひしらひて、ひとへに信ぜず、また、疑ひあざけるべからず（＝だいたいは本当らしく受け止めて応対し、ひたすら信じこむこともせず、また、むやみに疑ったりあざ笑ったりしてはいけない）」という結びが続き、そこが段全体の主題になる。

A 語句の意味と読み（1〜7）

1 ①「あいなきにや」の「あいなし」の意味を書け。

2 ②「多くは皆虚言なり」の「虚言」の読みと意味を書け。

3 ⑤「やがてまた定まりぬ」の「やがて」の意味を書け。

4 ⑥「かたくななる人」の「かたくななり」の意味を書け。

5 ⑨「浮きたること」の意味を書け。

6 ⑪「げにげにしく」の意味を書け。

7 ⑭「詮なくて」の「詮なし」の意味を書け。

B 文法（8〜13）

8 ①「あいなきにや」の「に」と「や」を文法的に説明せよ。また、下に省略されている語も答えよ。

9 ②「多くは皆虚言なり」の「なり」の文法的意味と活用形を書け。

10 ④「境も隔たりぬれば」の「ぬれ」の文法的意味と活用形を書け。また「ば」の働きも書け。

11 ⑤「やがてまた定まりぬ」の「ぬ」の文法的意味と活用形を書け。

12 ⑦「さらに信もおこさず」の「さらに」は、どのような働きの副詞か。呼応している語もあわせて書け。

13 ⑮「いとど定まりぬべし」の「ぬ」と「べし」を文法的に説明せよ。

C　主語・指す内容（14〜17）

（14）⑨「浮きたること」と聞こえてしまうのは、どのように話す場合か。本文に即して書け。

（15）⑩「鼻のほどおごめきていふ」の直後に「その人の虚言にはあらず」とあるが、「その人」とはだれを指すか。本文に即して書け。

（16）⑬「あらがはず」とあるが、人が強く言い争って否定しないのは、どのようなうそか。本文の言葉を使って書け。

（17）⑮「いとど定まりぬべし」の主語にあたる語を、本文中から抜き出して書け。

D　口語訳（18〜21）

（18）①②を含む「世に語り伝ふること、まことはあいなきにや、多くは皆虚言なり」を口語訳せよ。

（19）④⑤を含む「境も隔たりぬれば、いひたきままに語りなして、筆にも書きとどめぬれば、やがてまた定まりぬ」を口語訳せよ。

（20）⑧「音に聞くと見る時とは、何事もかはるものなり」を口語訳せよ。

（21）⑭⑮を含む「皆人の興ずる虚言は、ひとり、さもなかりしものをといはむも詮なくて、聞きゐたるほどに、証人にさへなされて、いとど定まりぬべし」を口語訳せよ。

E　内容・記述（22〜25）

（22）③「あるにも過ぎて」から⑤「やがてまた定まりぬ」までで、筆者はうそが事実として定まっていく道すじをどのように説明しているか。本文の流れに沿って説明せよ。「筆にも書きとどめぬれば」の段階に必ずふれること。

（23）⑥「かたくなる人」と「道知れる人」とでは、その道の名人のうわさに対する態度がどうちがうか。説明せよ。

（24）⑫「つまづまあはせて語る虚言」を、筆者が「恐ろしきことなり」と言うのはなぜか。説明せよ。

（25）⑬「あらがはず」・⑭「詮なくて」には、うそが広まるときの人のどのような心理が表れているか。説明せよ。

F　文学史（本文全体をふまえて答える）（26〜28）

（26）この文章の出典『徒然草』の作者名と、成立したおおよその時代を書け。

（27）『徒然草』は日本三大随筆の一つに数えられる。あとの二つの作品名と、それぞれの作者名を書け。

（28）『徒然草』の序段の書き出しを、「つれづれなるままに」から「あやしうこそものぐるほしけれ」まで書け。

【テスト直前チェック】この三つ　❶「ぬ」は完了か打消か。④「隔たりぬれ」⑤「定まりぬ」はどちらも連用形に付く完了の「ぬ」。未然形に付く打消の「ぬ」（「ず」の連体形）との見分けを、接続で答えられるようにしておく。完了の「ぬ」は、下に体言が来るときは連体形「ぬる」になる。 **❷「やがて」は「そのまま・すぐに」。**⑤を「そのうち」と訳すと即アウト。⑦「さらに〜ず＝少しも〜ない」、⑭「詮なし＝かいがない」もセットで確認。 **❸記述の答えは「うそが定まる仕組み」。**人の誇張＋年月＋場所の隔たり＋文字への記録に加え、⑬⑭の「否定しない・黙ってしまう」という聞き手の心理まで書けると強い。